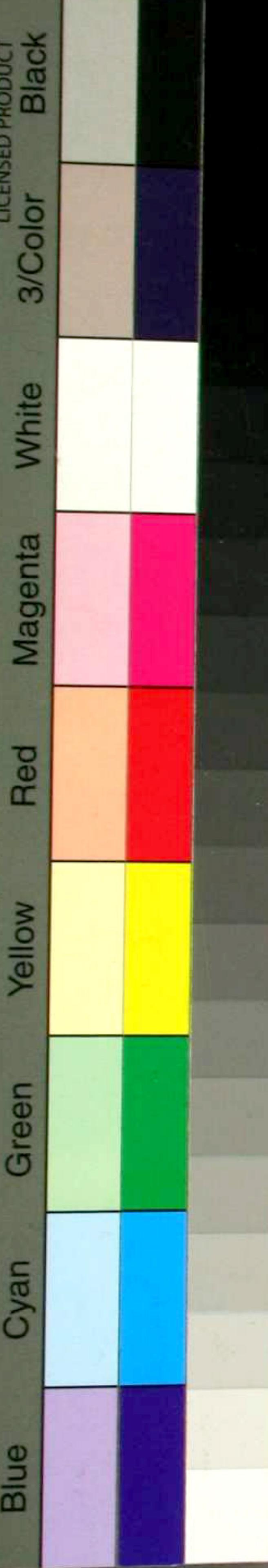


**KODAK Color Control Patches** © The Tiffen Company, 2000

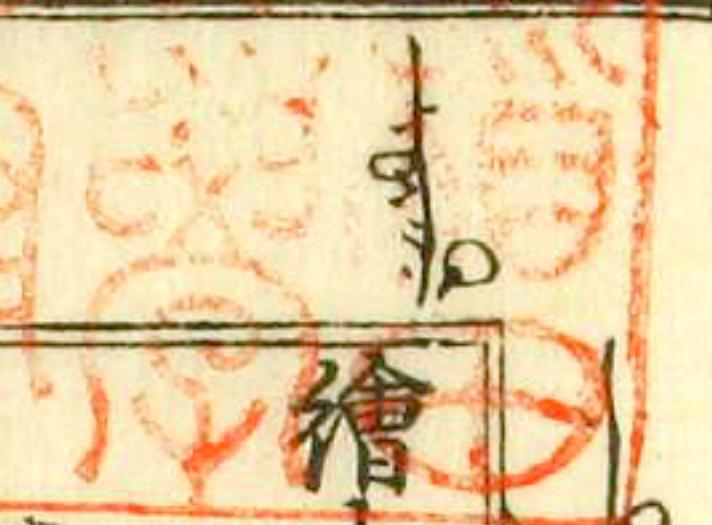
**Kodak**  
LICENSED PRODUCT  
Black

Centimetres



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

13  
號卷  
872



繪本合邦迂卷之八

圖

錄

明治三十六年  
十月  
臘末

因代女と教んと傳と雖々妻よ詰

永尾氏が妻女生ち御小路で極毛と見ゆる

其二

因代徐左衛門永尾氏が妻生國に至  
医士因代は聖祖の法を授け給  
因代百生底教して妻公と見ゆる

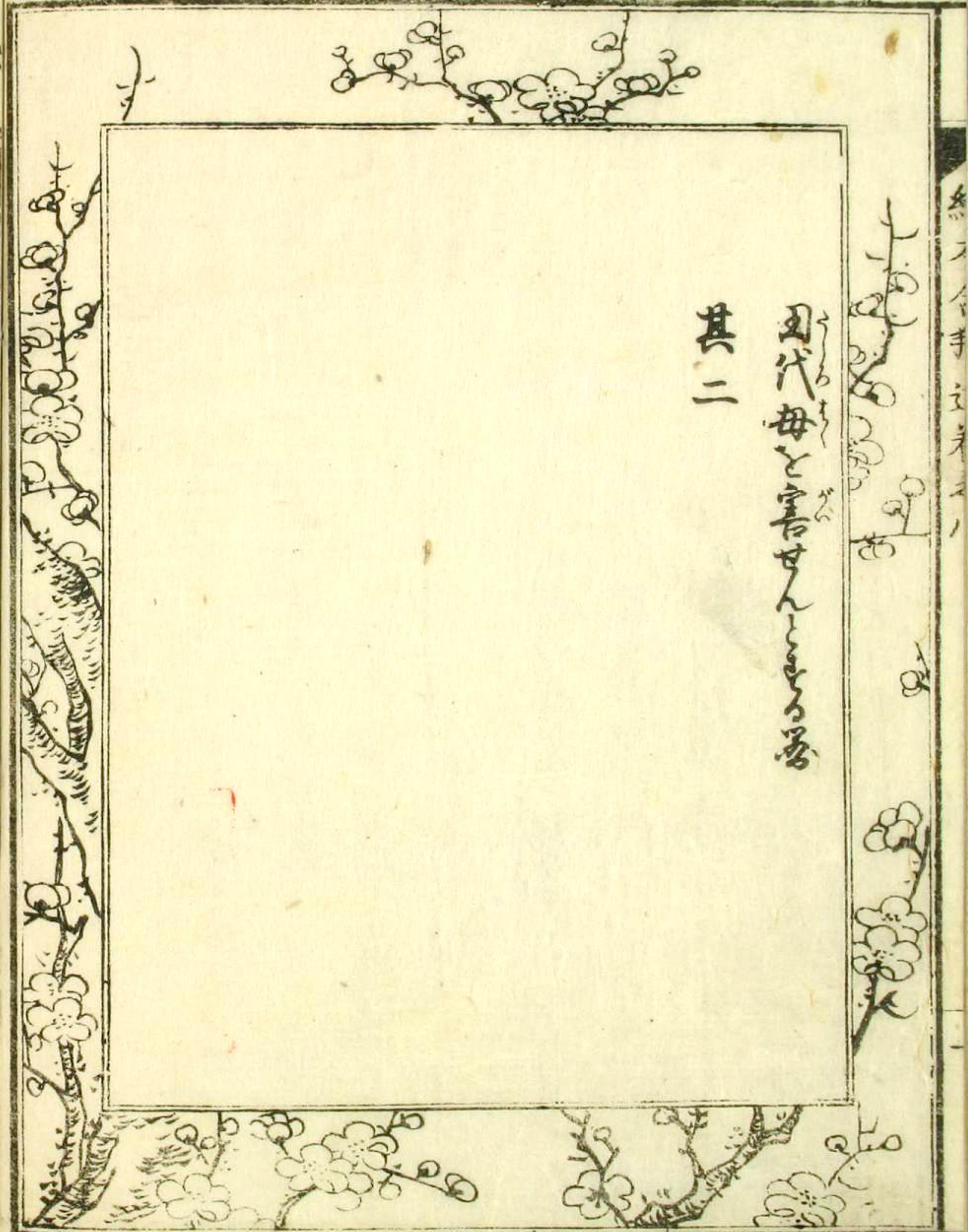
老翁が教子と因代法を行ふ事

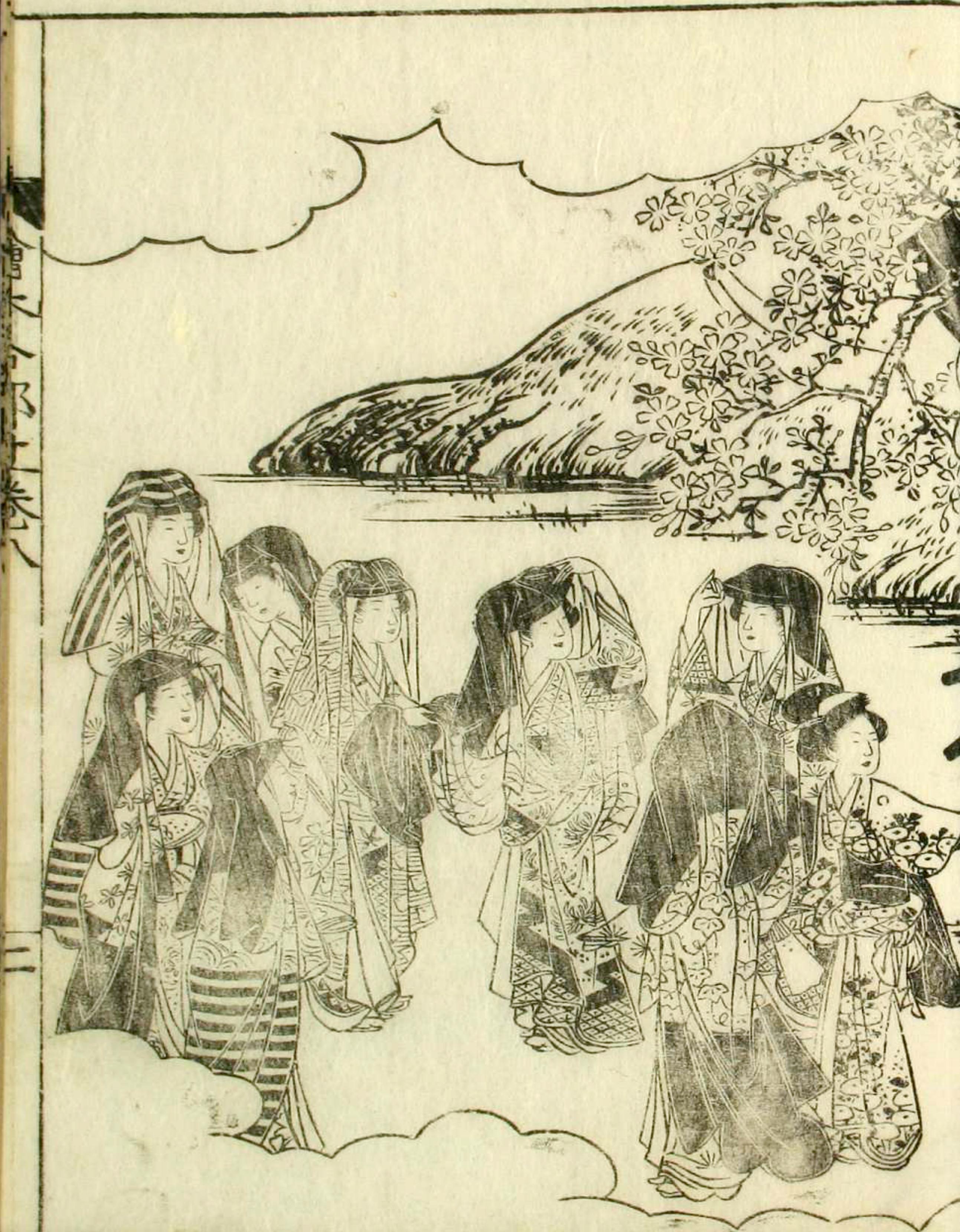
繪年合邦社卷之八

國會上、女を數人と連れて誰より金を貰

一朝の出来其日と、是を文母の養と承る。其の戒石より、人  
事成よ入て身と云ふ事と、食よむる所の戒石也。却後内侍公  
たまつて而因幸次々と、一時の様子と宣べとぞ。且又よかう爲情と、後事  
骨髓の微妙を、御眼をあわせんと奉る。素の風和よし、暫暴  
の心動くも、本と圓よお捨只者、承る事あに主がきの御と、此  
寵に其寵内と御の下とも小然度よ准を構うて、面の牆、御と  
御の門戸、御の手の氣くぬて、事よへだきの様えど、既  
ももね候宜と、内へ入る毎日拂や。且うて、又よ月拂かへるか、一  
女翁物語不覺婢女御女隸教夫人が、圍碁を打つて、其は多才人

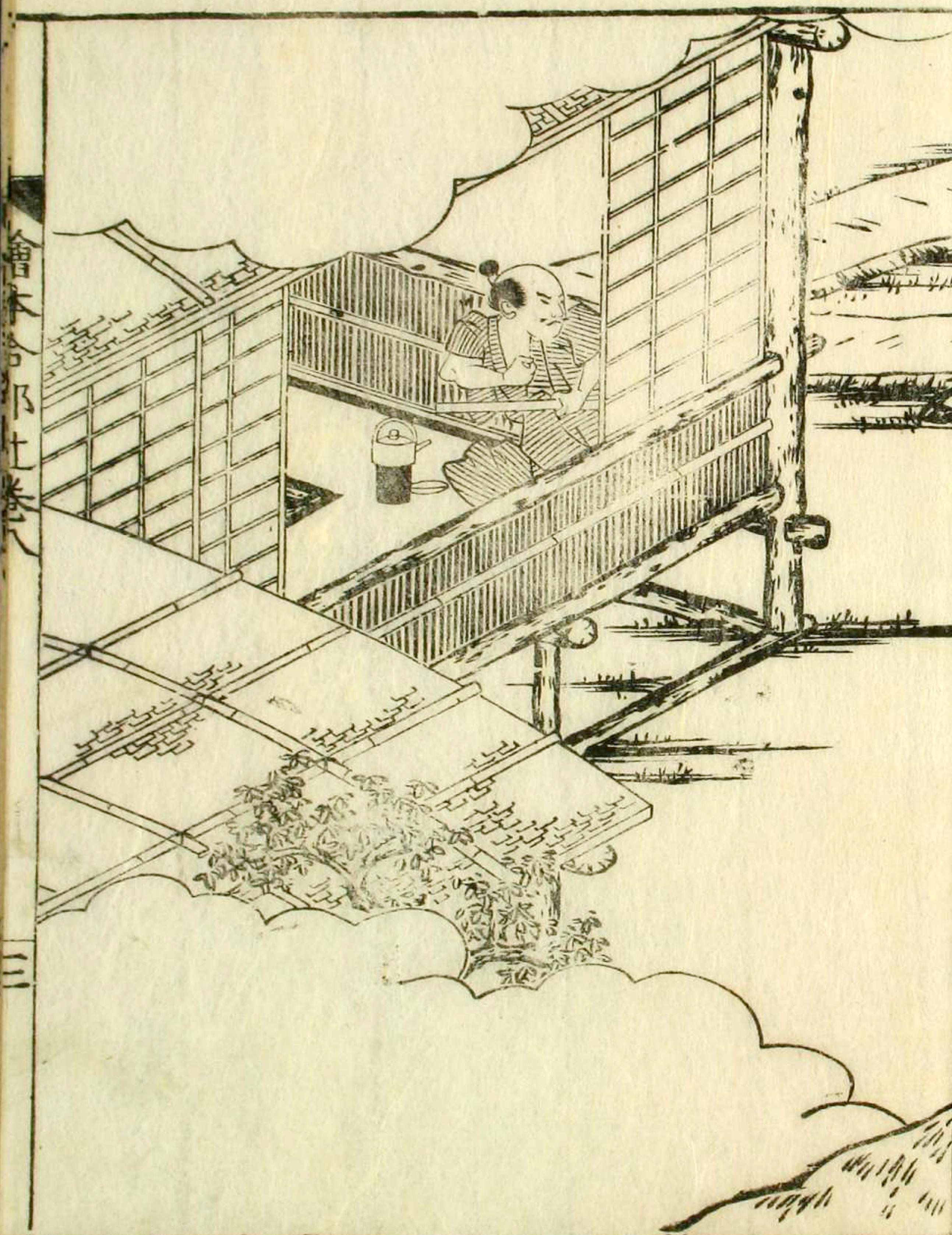
國代母と害せんと謀る事  
其二





三  
弓子圖

永岡氏が妻女  
生ち作は得て  
移居と



まへり。側の木の向げに水屋の内をすむ者人衆消ある。まへり。風が引  
きまへり。故と人あはれとて海物の涼より人數とて多く多めの例又  
あはれ不覺する事は被衣同様よろしく其面取よへて。終ど奉腰  
たる代かく害穢之人をうごとにあへて。其中にましまきが壓  
さのれり。只一付と已。近坐をせしが早々物もれり。其取扱は  
と高足をもてて履底考。其ひ履とえぐと粒多集あり。あきび割れるま  
拳勧と仕候。で経う。とやま今日の花糸。粋糸。系消は既竟。免紙へ來  
草のを與とり。ひとへぬみへ。必ず人を内切下。よじてまほ清女  
とけん脣の涼よ身と通きんこと方全の納。うそと口魚と空。一燃りよ  
り。我をよぶ物の行方を。やまく。參り。ひの。寢よせり。どと。免紙。され  
奉腰と。白。か。も。免紙。と。食。婢。を。よ。お。難。く。ま。の。壁。の。廉。き。の。腰。

脚とあらわある方を探りて本ほよ幕をお用ひ女侍の真中まへも腰を  
幕の外に席と役者人等盤しもて解と将菜を切くら厨の役どより  
は興飲の奴僕役者と役者あり石窓と構へたと焚あく煙草と  
煙箭えゑるに本幕の内よへ砧砲のものもと笑代のあ形のア  
徹田代の竊よ後よ従ひ娘のえゑとよが主と狼と目的を  
えゑとよむよむに其の後と御まへ害易と付本筋をばきよおゆく  
也ひまうる村里よゆくの茶席よへく飯と用酒と膳と腰替よ通じ  
まかと養ひまよ野面の卦色と眺め放休よそ袁老の幕とれどよやく  
眼も離げず居た是日も脚修と肺附と考究縫をとよ写す  
ぬるものをれきゆく彼奴僕多聞の調伏と取納めやぐく  
幕を楊木ごみを昇りと慮往の便路よ門へた右前後と用

て辭くと内納は赴く候うる田代は方にもとめ候へ不うとまげ候と  
又のうちあつま茶店とまし出候とて布よきとせりとて物語は清らか  
不吉切そひ日の賀候とあせんとお宿よどと死ど只一筋の野路より  
あもんたださうともあもんたださうともあもんたださうともあもんたださうとも  
あもんたださうともあもんたださうともあもんたださうともあもんたださうとも  
あも口やうあり不す内傍よの居あう田代をもと便へるに寂寞  
にして人有とも見え其ほの方ハ産林の森よはらしく邊と遠くも便  
立よきが實に之のある場うりとくよに環状の田よへ生植のえ不  
可品の中に產林と内食く只農事本業とまでんと活く内居する者  
は多きく甚多の人ちあるとぞ今ことと小松の遠方より廻へるに止  
も殺す人の虐從うつてのでもせむを列く内候をば承れとす開年もと  
もじゆあるとぞ不承し未だく跡よが不發へて徒ひ其ほの不發軍をも  
れよ先達て表れたその酒井兼好は大曾の野たるをば人の足を擋る  
をもとすとすと見ひ處て内食くちあると代女も其中よ稚くぬ  
名ひおなえ茶とアキラ愈ふを至極よきとやくも力と接ね奉ふ相  
のむと御として遙に直と穿て躍出と代女と同とく只一村と切てそふ  
あもやけめぐとそすよ田代はのゆをあう又二人の対と秋の輪と加護と  
の輪を後傍の石よ壁と接ねよ例は不發婢女の面へわざと消褪とむ  
田園の中ともいふとそまひくと遙く田代は扶ぐうと怠じて死上  
らえとよすとよす度よ深く内宿る狼藉との事はとひやう早くもと  
とまう起てもうとせりとせりとせりとせりとせりとせりとせりとせ  
きど人勞の仕事よめとがまくとよは狹狹の砂とえをとてよ這箇者  
の内みとへき生ぬるよめひて達ぐれとはとせりとせりとせりとせ



山社士の事のやうな事と尋ねるのをやとおもひてゐるが、  
貴は安樂と人情とがほく眞理と實とひそむよしゆうて、  
破れを譽めと聲と寫す寫すもむせれへ者仕事機縫と苦くると難  
候ふれの面もあまきの娘は室もとやうひんやうく因代と實  
今まに來るの方と見早にとよびる

源氏用代は兜の法と教ひ候

既やと本當よりは心もどけ難て先づりま事無と厭と勝  
卑さへよれひをよ用居えきよていたゞよ構に待まつよ今多門かの發はくを  
癪きずよ風ふういれ行ゆを半人里さんじ下さのよ窓まどらを波江なみの砂いさごよほんや  
に候まりよともあびかぬよしに又またがんまじど里さとの取とり中なかよおあくを意  
情じょう疾き病びの内うちを候ま温ぬるかかと仕事わざうまどもよく幸運こういんと矣や又また此  
の癖くせうきにあくまで主おも病びよゆきをうもよに足あしの奉まつ勅てつ名めいすよを  
かくふ細ほそあくびあくびは對たい一面いつの情じょうも捨すてて考かん査さめたるく毛け毛けと秋あきく是  
やに候まうよまひ甚ひ度ど、かのふ細ほそや温ぬるど口くちもとと偕とも同  
多たく前まへ代だい更よ後あとの朝あさと熟じゅく寝ねく事ことよろしく候まうと承うけて是  
勝まさと更よ喜うれしきえあひ、實じつをさうと謂いふ事ことの躁そ鬱うつと同ひとじ思おもふ  
はまされあと坐すわてゐるを許ゆすと坐すわてゐる爲ための奉まつ勅てつ其その御ご人

よゆるにあらねどもよ哀情とて文せりとゆゑもすまうまば又  
卷あが多く今よ揚ひうどとうべ化よほの裏もすと後田春松が  
娘と私情と通ぜし娘より長崎へ往よ及んで敢見と取らずやゆ罔の後  
渠がち情と娘悲情と妻としてかくに今う遊よを本にゆうまで  
蓋報と食と名實と接く詳よわざうなきを人よ歎息し先よも  
くるとく是下に本理と夫の性とさうに行ふが故き本と云ひや  
男女の情の太然とて行人坐立不貞とも絶本あくびぬえ  
狀ふの情の深厚きよはせど栗金の一粒柰の一滴のじんへ至くま  
さうと女よもつて御あつましに是下に爲情のやすむむ作と傳  
て不測の難とれしけと歎うなさんとすまゑうとゆつて味  
もやい人汝後渠と娘の名と捨良縫とおと死燐あぶ禍と病と  
病とすらうよしと口面と口くもじと怒よ殊々と曰代がーりうり  
色と眼とを翁の傍え未だたのむにして家赤とわざぎとにあくび奈  
何ぞ情の一婦人よきれの念と迷ふと勤めと妻と費さんや我も  
一箇の丈まことに唱帰妻すよひとくとみと知りて死よよまか  
ごくと翁の蘊とゆて今夫人のものゝひとうち半身ゆるよ達う  
引くわく入渠キテと譽もあく有半身すと妻よ外し終ふと  
家室の名と度人よかとせの携てよまぐら渠と對して  
真砂と有人とて放うるぬ人の化萬せらん國家の曲赦みえとくとく  
被令植と娘のれ情うりとも漫うるの娘とひとむ理よと是とゆくと  
思ふよ渠と對してうとく鶴の身よほび思ふくよくあ翁と極く

タマモの意は參ざるゝと云ひて御子の御心を知らるべ  
即ち対室と本く烹調と焉の外別無事と候給にてま  
しもが志義とさび歌長と鳴海のふき水のとく接とて濁せよ  
様ともてんと前史の対室より是下平素の付すが殊然  
特徴の事へ矣あるだまに只管想を乃ち方す孔孟的道の  
理耳よへば却畢竟鑒の理と云ふ必あと云ふと以はよあつても  
祝駄の後高持那の矣まうとも其意と圓に本放を以て況や素がごとて  
ものと極め理とをもとすとくらの差うあるん殊ども是下の在乃  
どくせ伏田の歎と引出さん事自本まうと將し歎くと云ふ  
内頬をとむげく田代側をくより素是下の志を理とくと助良  
あらゆど一ねり學りた百年の外と得るをうよおびて御者歸人の  
内情見る所もあれば是に至間傍へまうの御と接て是下の接と義  
がくも御とうれ恨あるまゆ身は拂ひ下の及物と多く行金をもる事  
三日三夜まで後其取物とほく一昼夜の内は百姓の食下と通じ其人  
ひれひととうまに是下帰人のち財力とおり試はま法とめりて總合  
ははよ食と紙の助あくとも米日石面の鍋と豆べーのあきは後難も  
よく恨と事のあも晴ほまくし年いかにと云ひて田代又は接び承え  
て支するものとも今後難と恐るにあれば義長其法と傳へりて傳よ  
ゆけのに急は風うるま事を傳ふるも言ひど強は清水むゑ人を乞ひ  
金の法と奉くやうと田代原恩と附く再令と即ち昔の眉と筆  
てもあまぞあつる

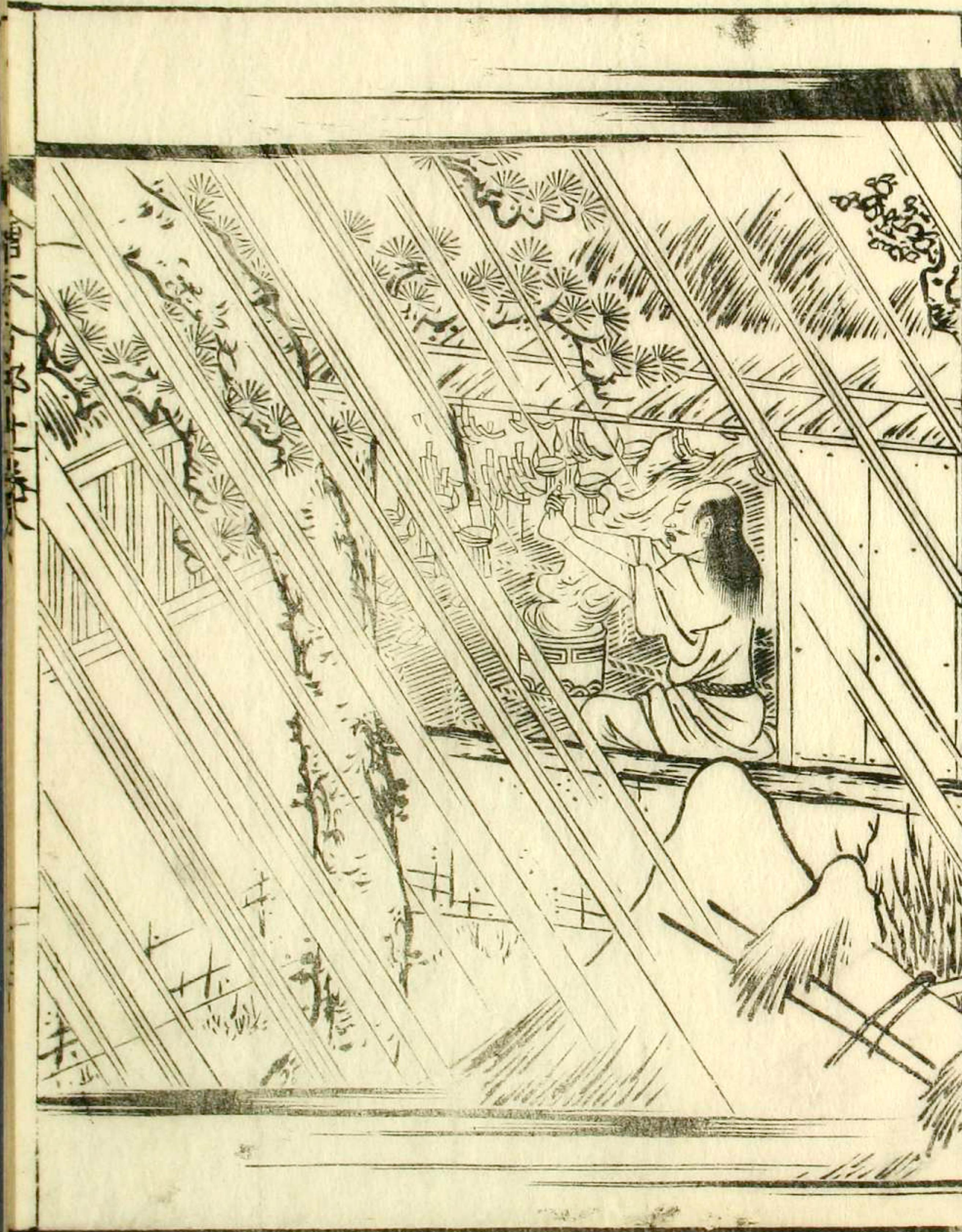
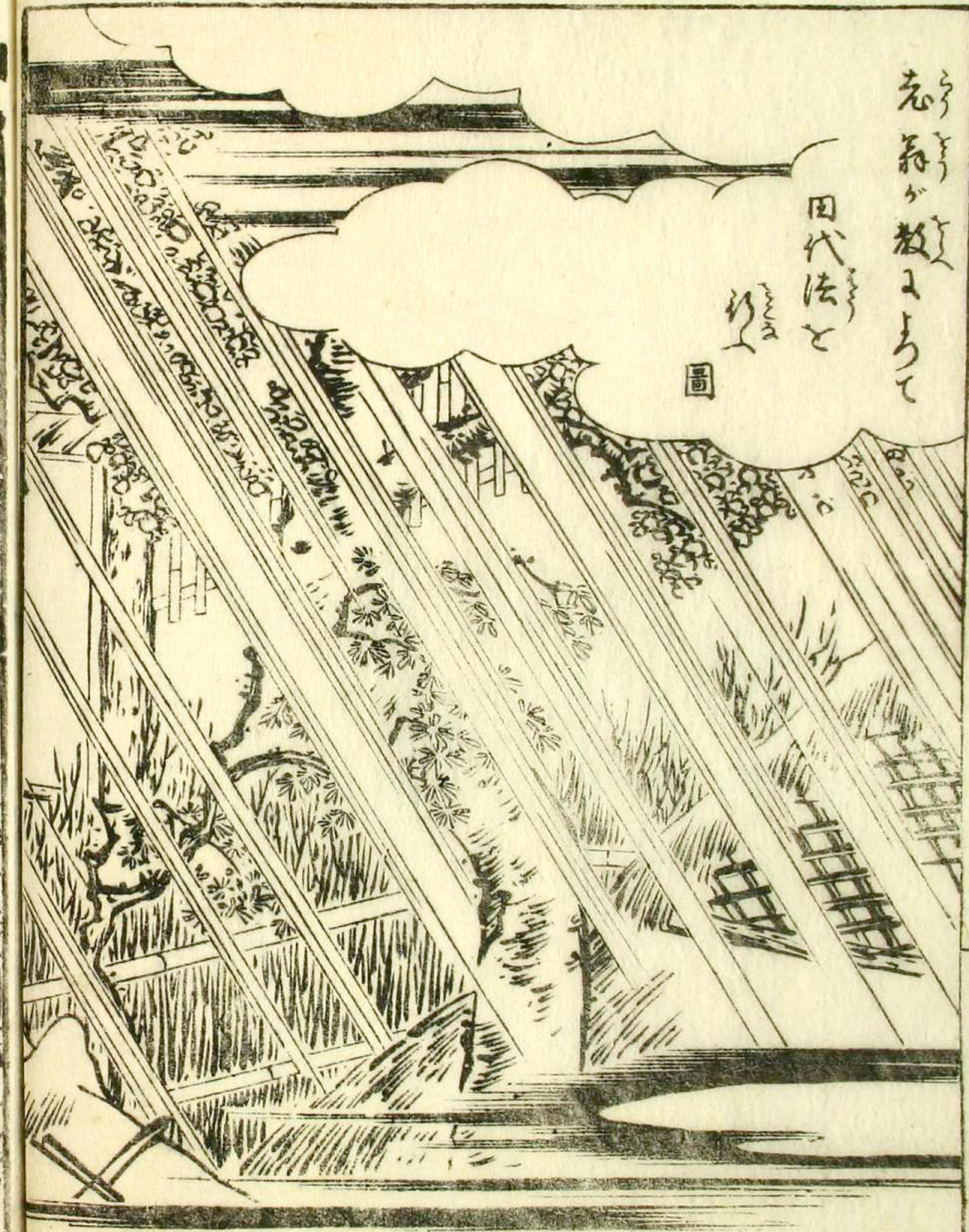
田代百姓と類くもむる語

志義が教えようて

田代法と

りま

圖



かく田代がたあつたる人の事と見て、荷候とある時は、是と申す  
事と見ゆ。あすあす母體と夕餐と御くととより、其内に通じ  
従間漏をもつて、御くとと見ゆ。松本今日城より用事ありまき、御擅立  
まくよお徳をうへて、桂候恩とりまき、後一社の後徳ありわらまく幸  
とあ陸同く内へて、日昇をうへて、又徳の中には名と唱へ徳と去  
るうちの功德は人をもる理と傳く後示より御下御下御下御下御下  
侍てもれえ、化國赴國の後も先や角と幸いまくらとほんとありし  
元日正月、今宵と路とて、三日三夜、なる宿事とまく、一トテより義  
精と懇意、ひ名及び徳文と書写はり、おとと、其間へ行車も母  
の山すくにねりとがとうをもあべあまの止つゝはれられ  
うと、空そくやうに車もば母へえまねと法ど車をまく強まつ初

うの山すくの道の難有本大と國をくわせ、てはばへらとまく坐  
ひよく妙名の有純も志勝もとが縫すとよ居るわざに、はな黒つが  
寝ぐと起せしと手て大よねび共よ勧てものあとをしてむほなは欣く  
うと、徳と法の役ゆと通ひ汲水よと廻りと洗濯めくと夜と若く  
面の壁の附くれと古机の中央よ被ち身刀と房た在よと蓋の能的  
と頭じやくの香爐を五郎の流のとよ代してこれよ頭くをぐがまへ  
松文と喝く精神と漱く飲食附麻とらくお食もとまし已よと教  
三日の教あへば、病みをかと要出をうと烟けに一の丸み六七のふが  
抱て附く、病みをかと教言するがの姿形の奉初と、まくものまく林ど圓  
白波く極きよ殺言するがの姿形の奉初と、まくものまく林ど圓  
波すを致わむ、樹根の良心をよ蔽隠等もて御くとお腹食え

く寐へる頃たの耳の鳴うる声とそよぐ風と寒がたがよしと雪  
と追詰くるに切弊す又取て失ひて帰まふるもとなく利殺しげを  
捨てぬ猶云々及びどん都は高麗の鶴鳩鷺の頃とも酒と踰州  
山と探して柳川まで走て捕て蝦夷林までハ麻をぬく宿をと  
駆け疎遠不と捕て刺殺し後生數十と其殺されと殺す  
敗ふるもやうべ人の兵とやまと村里と離山野の人々と而ゆく  
堅苦地獄地獄の頃にままで眼にたまとの殺し日暮寄り及本を  
に九十九の生金と絶今一枝と根木と本も因みあつて年日を暮ると  
でく絶え因代人と手と縫あれば代へ立てる大歎今一枝よて空くせんや  
死も役のとく眼と心と口と齒で求まつても文は假をとき死に方是  
まことに呑めぬ行ひで死と死あをあふ死て胸しが魚骨をひ出へま  
か母恩日をきの幸どもう捕來りし蟲と強も乞求て泉水に教五  
毛の彼と久今一の教と充だ一旅にも乞はれと其處へとすりて  
來れ世人と做よ沙と沙を乞くに従てモ内侍が沙引を申つて母へ引  
まよと乞はも知び候う一毛よが沙を乞はれと勤居しとのと乞  
一毛よ乞はとおひ候時より沙方と沙と若きど不欲と至りて  
沙よ初りよをと沙く寝令も沙りよと沙の事と申ひて強く沙  
沙よ沙に沙るく三日三夜の教も沙くと今沙の旅沙く食事とも沙  
沙よ沙と沙よ沙く辛く起沙く勤居沙く沙と沙も沙と沙の沙  
沙よ沙と沙よ沙く沙と沙よ沙と沙と沙と沙と沙と沙と沙と沙と沙  
アリ沙と沙の沙よ沙よ沙と沙ひ沙に沙を沙つ沙と沙と沙と沙と沙

田代  
母と  
喜さんと

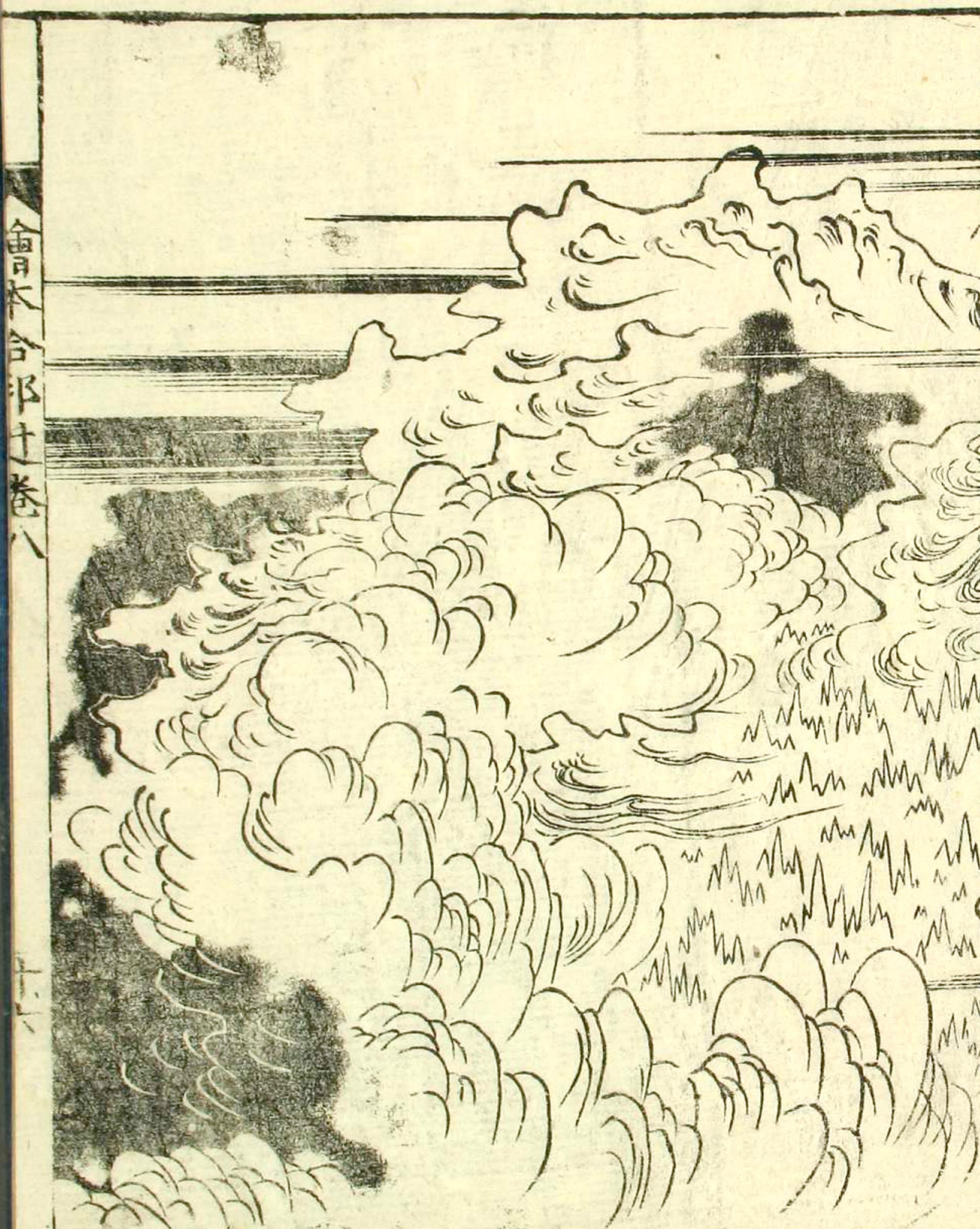
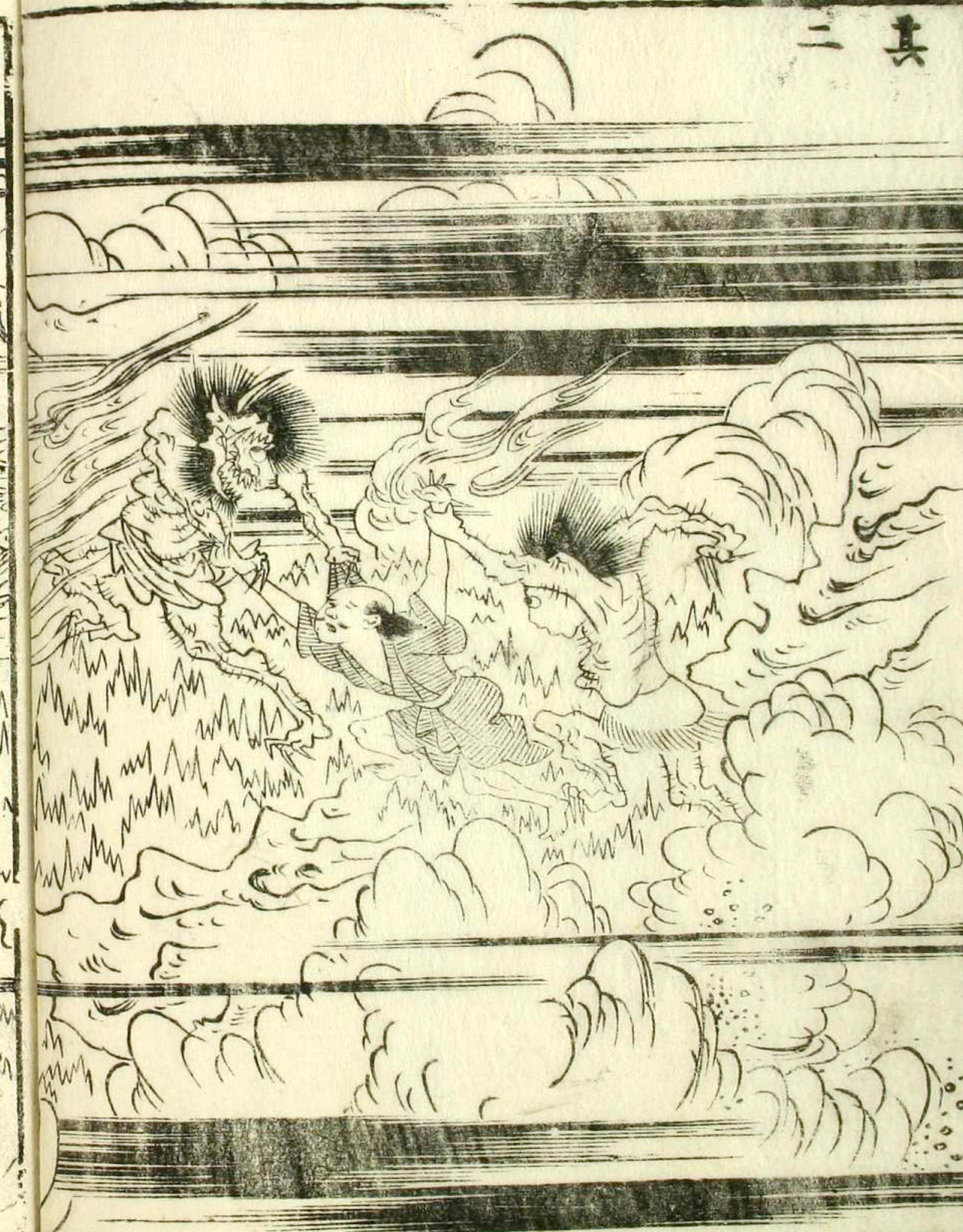
もと圖



美尼中へもよびて廁物至の隈よりと善く御櫻せど廻くつゞき  
おをと隣のものと純粧ちと詔取れやとと被どはまびとのまよ  
色、祀鬼とお方とあひてほどほなまう生榮事に祀と祭と奉也  
がまことのうねがひと奉と遠とも御来じ左角と日も書よ乃  
門外に坐くをすに彼方の野ならぬかの基と切く就み母は秋  
匠をくまひであらと想と云ふと是を年にもそばまを入ま  
松家の玉みをと母は遠くもぐくとすに詔もあよ賛の泉水を  
被と捕へ脛刀と抜て宣へぬ母のやうもく其とされは  
ゆくかうり方とも矢立ち更ひある其とすうのれ仲の介路にして  
たまき殺生とセキをさるの流程の魁と入う又へねキで一うめし其  
ゑと放てまと辭よと制をまのほひとまと懸れ全く流程よまされ  
ちにわざと氣はくもひと間より間の舞もまへゆんれ  
あくと真法と換へる者う今まよす一豆茶の内よ百生の命と絶ぐと  
きよ今般五十の生と言したまばれ魁とく殺せば其教克く教か  
続くとまくとまく再び魁と刺とば母ばとまくは眞とと極く深と  
長寿の例より莫れと教全くの命をすあらう命と諦てこそ  
休むが復してひて死も叶(其方の死の筋)をめる無類の奉  
勅とまば骨とある事があらむ教の叶ゆ縁由し實れと叶とくべ  
其と給くと九十九の生食と相ひて真見と滅せよいよまくも  
の聲を下と理不きよ集めとえ正をせばはまの事教より數  
生に恨て阿多の心を固ましを憤る心全く處を只一圓よむれと

そのまゝお母が御早にもそばに到着て、お母は身妨とて立つてお  
母を引廻し、彼意を引奪ふとせば母母ともて掩そし且事方のもの  
を、お母うさんといふ者じとのふうが想くより思ひ出でる今、金とおも叶  
き、真の間よき人氣早もてよ思ひ出でる今、金とおも叶  
ば母を殺すと、其眞よき心を奉の心をひと筋よとお母うとも取れ  
ふ彌たまつ血眼、うとうおぞめひと入れと、傍あへ母うとも取れ  
の死ゆと云れ、經刀とれあして只一宴と死する天界の事うしむ  
て、やあうえ忽眼晴をわとせんばよ例を後まことに、母を差と  
えちよう風毛の止ぐて、今と重りし心をく冷水とにはあすと場で  
ぬ活と絶え、死び物も身もと無くと死する事起とお  
不盡かと死へ武の氣と恐く圓生の法とぞと死ふ餘ゑく惣身ゆく  
に冷て全くひだり解さるよ鷹尾よらしの初夢あうて跡幸微よ御まう  
母作と云ふと、お父參と云ふに射ひ凡る業のはこのみの障経よ  
がよ今、お母あうとある彌たまつまのまうと有い筆と  
隠す者も見えず、お父參と云ふと、お母うと見ゆにうき  
隠れぬと、見ゆる族うまく見えゆもあらんと、猶と檀の房と猪  
事う有い活と詳々物語多べ、活様よとお育てて、母是よと云ふ  
千人の命と終りと大歎と聲一已よ九百六十人を殺し、今一人もうて  
お母あうと、自らの元とお母其事達と聲と猪とお御わと不づけによ  
害せぐと、お母死活と聲と、聲と猪と御お母發の聲と其聲と圓で引  
上とおもてと、死は體へ化中に、ほへ發の聲を母のよに送りと絶えよ後  
と是と歎て、お母あうと多くの教はし對母とおもふとせんとせん

其二



間魔王及び冥加利と曰ふく社せり附よ闇と紙と脱ぬ百鬼の奉と絕利  
母と殺えんとせし見よと急令と絶え間の苦とあはれとすとま  
ひ詠ひゆうとぞ詠せし見よとびがなに许を以て後悔をとちとし  
景と感せよと食じゆと矣よ会ひのあ耳よへきものれ合うよ  
たうとも復よも母と殺えんとせし見だ大をきうきば今より出家し法  
國と巡りて後世永劫の苦と遁えんとぞひへとおとづまく青云天のえ  
ひとひやまふ難と苦とぞひうじよに傍とぞ生く今悲かな國を  
考究とよへ難事もなし中是も出家せんとのゆ室よ煩惱は苦悽の體  
よき事とぞ一か出家しきば九族至よ生ばと其功はづくびと却  
え母はび五居をのむけむうりとくに情てれそ其業をよ變て原と  
よ成り遂に圓の役体と體ゆ母及び彼歎れの里のとみに時と名づけ

放て三生性を修めくはよきとあひじてそよぐるをえどもまつた  
昔有れむ利口しゆは真時もうりて翁田が娘の爲情もとちくそ  
御しゆにうそを事テ終は承家の種又へ定否のれりあるよシ代女を  
おもかげ全く翁田が妻中よりまわらはせぬ白にしぶまさの有至  
じた奉初うららかあは翁田が母地を離して逃出一スア代女はほな萬  
妙引しゆすて今よ然と再び今よ嫁せるの様で聲せしゆ承家の甚ぶ威  
懾てお母行は別は技術を手ひり代女ハ半身がよ抱て扶助わづらうと  
因ふ云東本六道の事まは組の方後被役よしよ其事あはれがを  
這箇彌をあづめく彷彿と其るよ歎きことの後あうを別よゆく事。あう  
おもむる事長ことをねまよがざとく人編むの處延年とぞと書く事。あう

